

余在常服急之務必追思往
事而有所以深感焉至其所
以深感者蓋不意是則豈能
得者之哉抑尚余執蠶北山時
朝威衰弱幕人跋扈於是
正義斃於國事者往往接
踵朝禁洵々無復不憚地終
者余不幸得病歿于天下
有心邪不共忘余也雖然余
報國之微衷未嘗寸刻忘
搗百思千慮以施行之
然無亦一人來顧者矣則無
亦奈之如而已會有一日松尾
藤井二子來談時事因幸
述微志以爲私助中興之
業繼而香川山中大桥園
田坂本北嶋橫井大城森村
島原海部之法子時來



田坂本北嶋橫井大城森村
島原海部之法子時來
論時勢蓋齒使注目之際
多得因禁田子之家以通于
余也禁田子之節義亦豈其
小哉遂至丁卯秋為之文
如得逢石川子又逢坂本子
往々幸極品川大久保墨田
木戸廣洋西郷之法旌而
以得遇一新之時亦何余僥
倖之甚也然朝廷大論一
新之功以臣列上等且詔
命殊懇以賜賞祿臣等幸
不堪感佩哉實以不堪恐
懼慙愧也嗟呼余素愛見
漢設於一新之際何功之為
矣唯借法久之才力受法
久之效喻以專志于四方而

矣。吃借法久之，中力受法
久之，及諭以傳出于四方而已。
若夫以余為少，切乎，蓋謂
松尾、藤井二子之切，不亦可
乎。余實因松尾、藤井二子
以得見秀川子，接秀川子
以大著內地之事情，接大橋
坂本北崎、石川諸子，以大著
外國之形勢，因石川子以通
薩長，而以遇一新之時也。

蓋秀川子則松尾、藤井二子
視之也，如大橋坂本北崎諸
子則秀川子視之也，如石川
坂本則大橋視之也，至接薩
長諸雄則石川子實視之
也。嗚呼！是六皆所以基于松
尾、藤井二子也。為自死得此
階梯，豈得能有今日哉。是余

階梯豈得能有七口哉是余
長考所以深感者也

今茲庚午以次三年正月
六日於東京日比谷門外賜邸
卹小宴分賞典賦不絕以表
微志聊以謝法君夫近者
易狃遠者易遺古今之通
弊而以窮達憂慄或濶公而
正大之道者亦往往未以無之
也豈可不戒慎乎如我舊思
法尺則實純忠正明之士也
因飛以窮達憂志者也豈以
權或閑于意者哉余亦因
飛挾而步以交法尺者也唯
願得如舊以草莽相交共建
神州與各國並立之大業法尺
夫勉哉宜以并凌前年之艱
苦矣抑輔翼 君德正名義

神州與各國並立之大業祇及
夫勉哉宜以舟楫前年之艱
甚矣抑輔翼 君德正名義
以臨內地固易制之理也而於
經畫伏枥行之艱難以得過
今方今海外各國萬里隔
絕於比鄰也不是難制之
極乎然我不能制之則彼必
將制我六國必危之勢也今
我於未之縱節十倍于昔日
之艱苦猶如其不易矣傳
曰國家閒暇富此時般樂忘
教是自來舊也六法曰勿
恃彼不來可以恃我且待宴
今其時也若夫驕奢淫逸
不憂百年之大患者死金
所知也矣法久夫勉哉比業
勿捨余

所知也矣。法久夫勉哉。此集
勿捨余

奇招尾孫井二兄

為屈北山曼世態。此可無
後一人來。感尺吃獨能如
我屢叩柴扉。謀挽回

奇法兄

北山雲鎖雨冥濛。一片丹
心曷互通。中懷大權恢故
業。法久必力我無功

又

神國何徒寺。亦成宜忘海
外制鯢鯨。請看英佛塔
孤峰。行在雄名亭。內車轉

具視

心可法友田代亮不氏也

この心友の代元女氏を
訪ふると家定女氏をい相
寄の長さ一文し無んとも
細長き一冊歎きぬほむ
起つて一説しむる都岩合
公の自叙傳とも云ふ會き
文章平しし字好也又
とせよ道後するん文章
抄うると名もあゆし状
景を述ゆこと極め
細し淡しと錯し吾人之
とせよ事ありと且つ公う
維新し終業とにこの
切りあふとあり其々
法式ふ其ゆと嫁するゆき
公し其率し面白躍
とて現れん轉し欣仰
之念を生せしむる人
之語る不し伝ふ此存

之念を生せしむる人
之語不之信する此書
副終其之海伯と出つと
系不悲あり岩人公詩
文之姻りある之命正と
伯之語ぬかし行伯家之家す
阿るるん此行果と伯
之命正とおる者もや
多めるるふと事も恐る
く伯古此信具終と
文章一之雄貴と施
す之を窮しと
死は此行終と命正
とわとしと推測
不安南と語か可と
歎岩人公歎其
出伯と人案し
之は此行と書つ人
之命正と書つ人
とありし事すけり其人也

此相と世つて人
之命歎の朱衣一以家談
とありしまきけらる其人の
歿しとるを古賀彦雄
氏の所より田代氏
方無印すんり未の刻
等とありしと云ふ文章
を名もあん公し遺念
ししれと云七海し
きしものうし
公し無業
とせらる世に侍ふ命を
伊使たり
とありしとありし仍と相
あしと家と存すと
云ふ

大正元年九月八日

才左衛門守

と世々百世に傳ふべき
徳は
いふとありしに仍て相
傳ふて家々存すと
云ふ

大正元年九月八日

才人誠手記



此の地は
少くも
在りて

を功を... 酒を
又... 所... 的
光を... 一...
山... 母... 梅... 櫻... 梅... 梅...
出... 鳥... 岸... し... 泉...
...
域... 車... 都... せ...
...
... 後... は... 家... 夢...
九... 文... 鼎... 命... 一... 時
... 書... せ... 時
... 梅... 櫻... 光... 菜... 一...
... 詠... 一... 謝... 一...
... 香... 味... ゆ... り... 一...
山... 功... の... 長... 子... 母... 一... 即... 此
時... の... 詩... 一... 一... 一... 其... 川

時の時るること其川
又依るに如く
政々きく如く
よく指さるる首部
物々の剥く如く
補いたる痕跡も
知の印の如く
しもの如く
しもの如く
何れも購ひ入る
氣の如く
先刻
本購ひ入る
言中も也
相承供考の如く

畫杜鰐行謝

白河田内表月書以

畫杜鵑行謝

白河田內表月畫以
已和去訪五京寓元
在丹詠及杜鵑之
多古今之奇言此有
者為又晁北題詞實
為其

君洪樂為公親筆

吾知吾出望之此
此亭之卷月畫

吾昔侍丹鵑鵑清君
偶來自白河濶割雞
其不其才和酒陽國同
指卷吾之山丹曰此昭名
杜鵑君云其左到安
步為性一極多如婦
洋人所和和入歡之
綠駱踪生楚車載作

洋人所死和人歡
緣駭生禁車轂
少者說自古死
三年方信利保
一海方謝豹
親年若熱顏能
都了於兒貌上
元共題里聖痕
併出小卷奧
君綠楚侍銀釭
名及鴨方話呼
考端一血紅尺
杜甫入蜀有此
仿世繼方究博
見郎雍在洛以
都了於兒貌上

見郎雍在洛少此
都行須自夏新法海
字横如七文以取千
畫一長自產年一記

君實唯願美天不
交心多年快杜終必
多在此所恒長備冊
離安以采哺乳將
賴功生力不唯此因
此秋是夫ら陸橋

山功秋表

此得山功表此橋は在りや
此を上危と云え少く
此は事と能死し
此を山と為すま是る橋
此亦もさるる為たかく
此子つて便と主康とさず

此亦もさるゝのたふ

ヒ子ウて便と主廉とを

底の念しおと

あ一此幅美社と

子おし便と

くちと

と概して素の

手と

幾念也併れん

この素く

の向も

吃の友人二三

くすあつこの

と腕に投下

あ

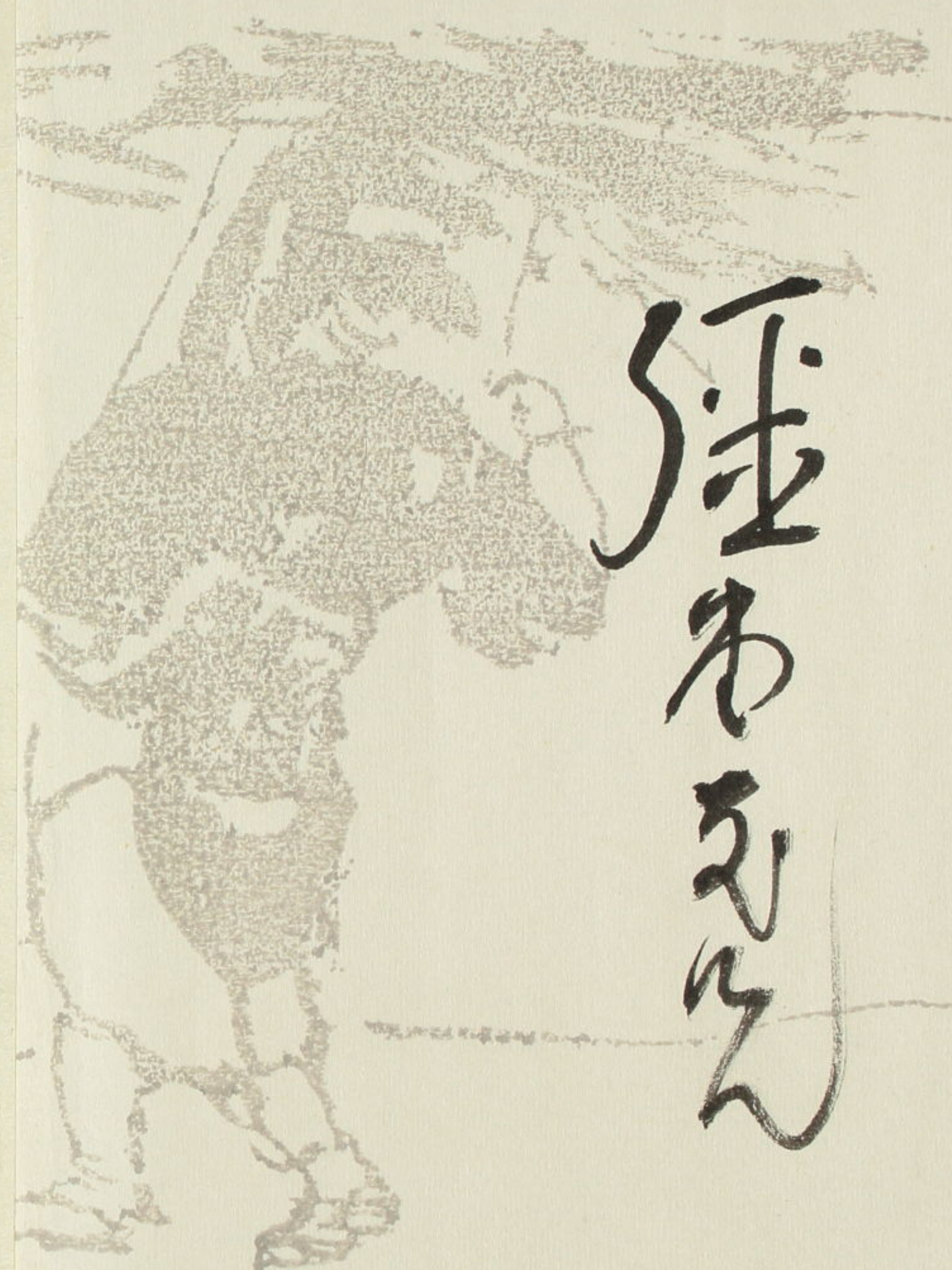
新

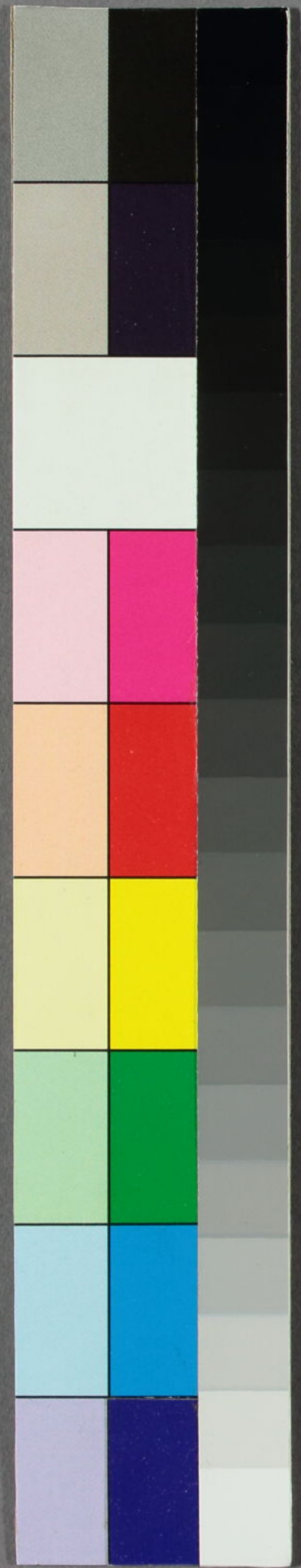
杖家

境

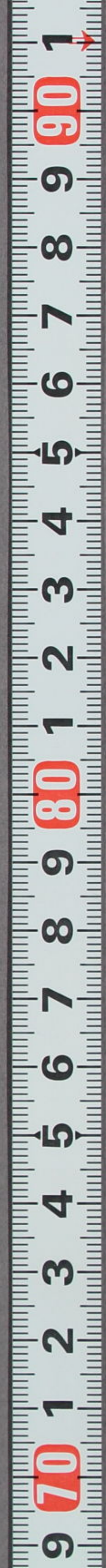
新
扶家
記

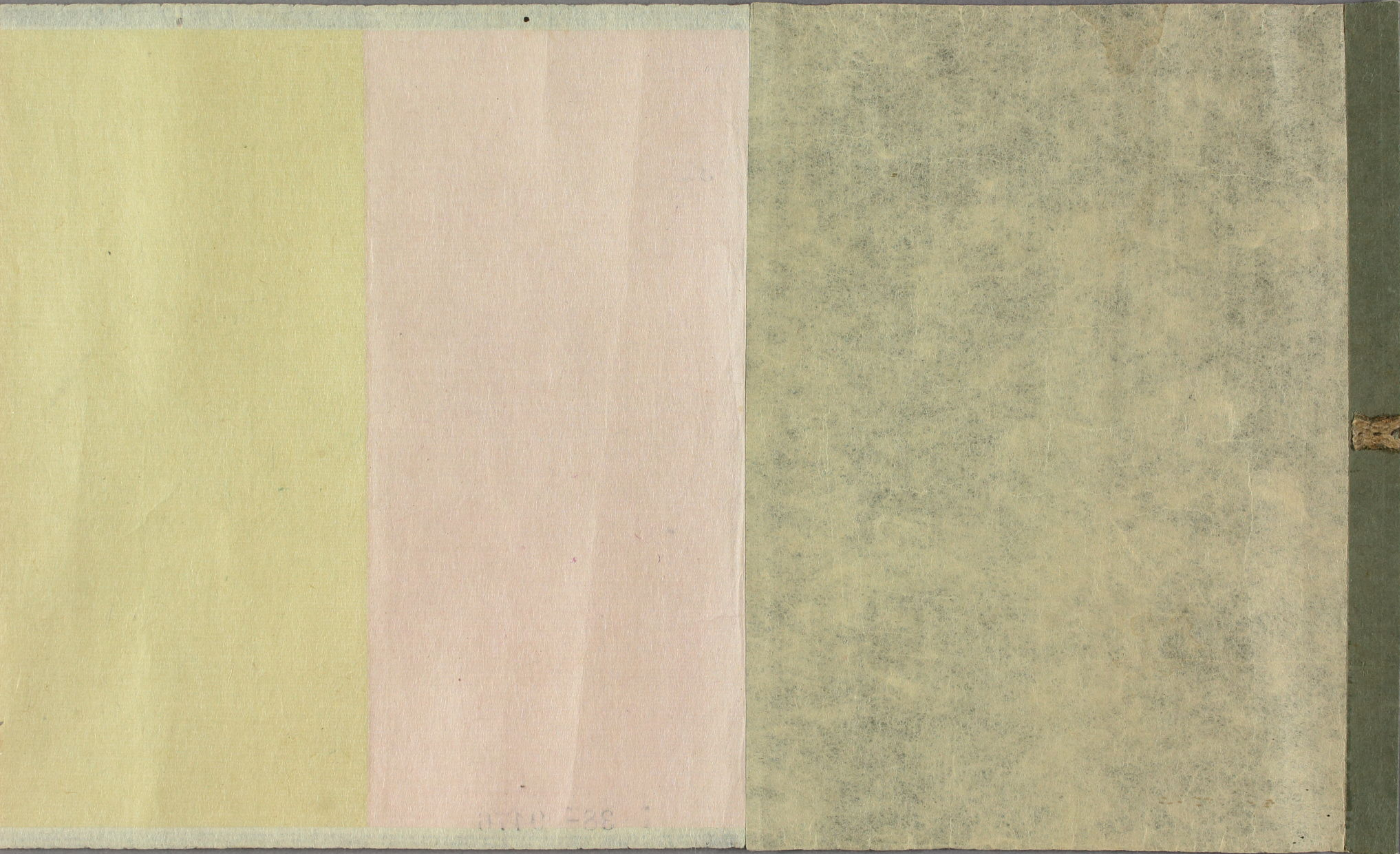
玉
為
記





特別
14
1919
901





余在常履急之務必追思往
事而有所以深感焉至其所
以深感者蓋不意也則豈能
得春之哉抑尚余執紼北山時
朝威衰弱幕人跋扈於是

31

特別
44
1919
901

38- 9476